



一貫コース通信

中高生時代の憧れから

私は、中学～高校1・2年時、野球部に所属している身でありながら、深夜に放送される欧州サッカーに魅せられていた。皆さんもリオネル・メッシやC・ロナウドといった名前を耳にしたことはあるだろうが、私にとって2002—03シーズンのリアル・マドリッド構成メンバーが永遠のNo.1である。ラウール・ゴンザレス(スペイン)/ジネディーヌ・ジダン(フランス)/ルイス・フィーゴ(ポルトガル)にロナウド/ロベルト・カルロス(いずれもブラジル)で形成された前線は、ポジションを無視しながら自由に動き回り、欧州各国の上位チームのみで行われるチャンピオンズ・リーグでも明らかに異次元のプレーを展開していた。彼らのプレーは、現代の著名選手達が見せるそれとは「身体能力を必要としない」という点で大きく異なっており、2～5人が狭いスペースで流動的かつ高速にボールを動かし、高度なテクニックで鮮やかに相手を崩す(即ち、極力走らない)。当時、カテナチオと呼ばれる堅守システムを装備した、セリエAのトップクラブ(ユベントス/ACミラン)も、欧州/南米各国から集結した言葉の通じないはずの選手達が展開した、その美しいフットボールによって見事に破壊された。当時の私が、羨望をもって見つめたエンターテインメントは、議論の余地なく世界の頂点に君臨していたのだ。

さて、こういった文章は、何かしらの教育的メッセージを付加するのが常であろうから、私的バイアスをもって次のように繋げてみたい。上で述べた世界最高チームを構成した選手たちは、“群れ”を求めて各国から集まったのだろうか？ 現在、監督やコーチとなった彼らが、当時を回顧している記事を読むことでその答えの一端を知ることができる。煌びやかな前線の選手たちは、ロッカールーム等で仲良く話すことは少ない(言語が違うので)にも関わらず、ゲームにおいては、その世界観を高いレベルで共有できていた。その理由は、「そもそも我々は、個人でも状況を打開できる」からだそう。考えてみれば当たり前のことだが、初めから仲間のサポートを当てにするような選手が、巨大スポンサーをもつ有名チームに招かれるはずはない。突出した個人能力をもった者が集まるから、集団になったことで生まれる振動をポジティブに吸収し、推進力に変換することができるのだろう。

「一丸」や「チーム」という概念が美しいことに異論はない。ただ、綺麗に飾られた殻の“中身”についても、たまには考えてみるべきだ。初めから“補完や助け合い”を目的に馴れ合うのではなく、最高のチームの一員となることを夢見て、個人能力を磨く選択肢はどうだろう。私は、昨年度の卒業生達とともに、最後の1年間を「一丸」となって過ごすことができたように思う。ただそれは、彼らが“集まろう”と思ったからでも、私が“一丸となれ”と指示したからでもなく、群れを欲する補完性パーソナリティを持ち合わせていたからでもきつとない。誠実に5年間積み上げた努力と、その日常で獲得した個人能力の結集が、外から「一丸」と呼ばれるものに見えたのかもしれない。卒業後、学校に訪ねてくる彼らと話しながらか考えたことである。

単純かつ勤勉な行動によって紡がれ、彩られた濃密な時間は、人に確かな実力を蓄える。私はそう信じている。もし皆さんが、眼前に広がる状況を打開したいと思うのなら、自分を

取り囲む環境や場所を、選択できる権利を得たいのなら、宿り木を探すことに奔走するのではなく、まずは「個」としての自分を研鑽すべきだと思う。例えそれが、果てしなく長い道に見えようとも、だ。徒労に終わる可能性もきっとあるのだろうが、もしかしたら、いつか未踏の成果を掴むことができるかもしれないし、思いがけない新しい場所を手に入れることができるかもしれない。独善的でもいい。そんな「自分だけの何か」に到達した姿に、大いなる憧れをもって毎日を過ごしてくれることを願う。逆説的ではあるが、「1人になることを選択できる者」に、いつか、「優秀な細胞」として働く日が訪れるのではないだろうか。

最後に、私や皆さんを含め多くの人が、途方もなく膨大な課題に取り組む。こんなとき、初めに考えることは恐らくだが一致している。

「さあ、今から何を始めようか」